

変化を先取りして事業革新を 繰り返すプレス部品メーカー

株式会社昭芝製作所



代表取締役社長
三原 寛人 氏

株式会社昭芝製作所の三原佑介社長（現会長）は考えた。このままプレス部品の会社としてやっていけるのか。今は仕事があるが、将来はどうなるのか。答えが出ないまま過ぎたある日、プレスした自動車部品に溶接を加えてほしいというオーダーが、突如舞い込んだ。「これだー」。こう直感した佑介氏は、ほどなくして「プレス依存からの脱却」を宣言する。バブル真つ盛り、自動車部品プレスの受注が拡大していた1985（昭和60）年のことである。

◆量産型から開発型ビジネスへシフト

佑介氏の父、創業者の三原信夫氏が会社を立ち上げたのが1952（昭和27）年。自動車部品を中心にプレス加工一筋で業容を拡大してきたが、「時代に対応しているのでは遅い。時代の先を行くことが大事」と考え、プレスの後工程となる溶接、塗装、組立と、自社で扱える領域を広げる高付加価値戦略を

断行。早くから3次元CADを導入するなど、売上高の6%にも及ぶ積極投資を続けた。数年後には自動化ラインを構築する一方、94年から中国、メキシコと海外現地生産を本格化し、リーマン・ショックで市場が低迷すると、今度は「量産ビジネスから開発ビジネスへのシフト」を進めて、設計開発などのソフト収益による成長戦略に舵を切り、業容を拡大させてきた。

現在の主力は、プレス、金型、溶接の得意技術をベースにしたシートフレームやエアバッグケースをはじめとする自動車部品。なかでもインフレーターと布を収納するエアバッグケースは、運転席、助手席から後席、サイド、歩行者用まで1台あたりの採用部位が拡大、同社成長の原動力になっている。さらに国内だけでなくフィリピン、中国、メキシコと早期にグローバルな供給体制を整えたことで、同じ品質の製品を世界同時に供給できるサプライヤーとして認められ、現地取引を着実に増やし、現在の同社の海外売上比率は45%に達している。

◆10年先の先進のモノづくり実現へ

3代目となる三原寛人現社長は、「いずれも命にかかわる部品なので、求められる品質基準は厳しい。不良品を絶対に



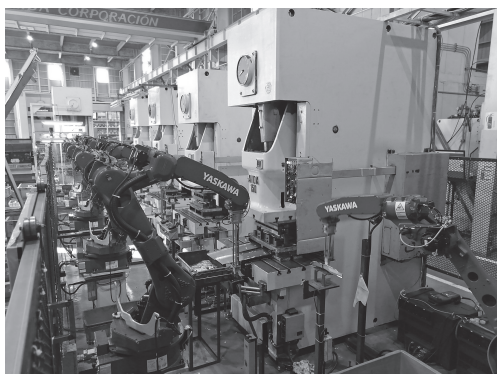
テクニカルセンターでは3次元CAD/CAMを活用した金型設計・治具設計ならびに自社技術を開発

社 是

高品質な自動車部品の製造をとおして人の安全と地球環境に貢献

●長寿の秘訣

プレスを数打てば儲かったバブル期。そんな安穏な日常と決別し、事業転換を決断したことが、世界的なエアバッグケースメーカーという現在の揺るぎないポジションにつながった。大局から情勢を見極める分析力と決断力、さらにいち早く海外進出に踏み切った行動力が光る。IoTをはじめとするデジタル化で、モノづくりが大きな転換点に差し掛かっている今、DXを先取りした同社独自の生産革新を展開中。変化を先取りする新たな挑戦が始まっている。



内製率 100%を誇るロボット技術により品質保持、生産性の向上に結び付けている

●会社概要

設立：1952（昭和27）年1月
 所在地：東京都練馬区小竹町1-63-6 ロジェ・ヌワール2階
 事業内容：自動車部品、建設車両部品、その他金属プレス／合成樹脂加工、金型設計製造
 資本金：8,000万円
 売上高：30億円・グループ合計58億円
 社員数：115名・グループ合計456名（2021年3月末現在）

URL：<https://www.shoshiba.co.jp/>



“ものづくり”の創出は快適な環境から。日経ニューオフィス奨励賞を受賞したテクニカルセンター・デザインルーム

出さないゼロディフェクト品質の追求が欠かせない」と強調、品質管理能力を一段と高めるため、数年前からデジタル技術を用いた生産革新活動を進めている。早くからICT技術を積極的に導入してきたことが奏功し、社内にはロボットや自動化装置などを組み合わせたシステムインテグレーター機能があり、「例えば、画像認識装置など市販のカメラを用意するだけで自社の製造ラインにマッチしたシステムを組み立てることができる」（寛人社長）。いわゆるスマートファクトリーに代表される先進のモノづくり現場を内製化できるのが同社の強みでもある。

「すでに受発注から製造、検査、出荷に至る生産管理全般の自動化は85%レベルに達している。これからも10年先を見据えた先進的な取り組みを実行し、完全自動化の次世代工場を目指す」という寛人社長。不良ゼロの実現に向けて、デジタルトランスフォーメーション（DX）を推進し、受発注から製造、検査、出荷に至る生産管理全般の自動化に取り組む方針だ。